International Center Newsletter

TAKING

Vol. 5

発行日 2010年1月25日

大阪学院大学/大阪学院短期大学国際センター ニュースレター

Season's Greetings from the International Center~Director Mike Matsuno



i Everyone! 私たちにとって2009年秋学期は本当に素晴らしい学期になりました。9月に13の国と地域、そして23提携大学から51名の留学生を迎え、1月8日には秋学期が終了しました。今学期は、ボランティア学生チーム(ISST*)、留学生、4名の国際センター所員、そして国際センタースタッフが協力し、また交流する様々なイベントが催されました。

まず今年度は留学生がISSTと一緒に初めて学園祭「岸辺祭」に参加し、模擬店で5ヶ国の料理を販売しました。オーストリアのカイザーシュマーン、中国の餃子、フランスのクレープ、韓国のキムチチヂミ、台湾のパールミルクティー。そして留学生とOGU学生が参加するスポーツイベントも数多く開催されました。バスケットボール、サッカー、ゴルフ、卓球、さらにはオランダのフォンティス応用科学大学から来た留学生オリバー・ハマヘールによるサルサダンスまで!他にも学生対先生・スタッフのカラオケ大会、クリスマ





(上)日本語と国際センター所員の先生たち (下)51名の留学生と先生たち

スキャロルの披露、クリスマスパーティー、またI-Chatラウンジでのハロウィーン、感謝祭、クリスマスイベントなど盛りだくさんのイベントが開催されました。学外研修としては、高台寺や宇治の酒蔵見学があり、日本語クラスの紅葉狩りにバーベキュー、さらには午後の専門科目でも授業の一環として松下幸之助歴史館、大阪府庁、錦市場に行く機会がありました。

留学生たちはもちろん社会見学を楽しんだようですが、ほとんどの学生が、日本語、英語での専門科目、J-Bridgeの授業の宿題や予習に多くの時間を費やしたと言っています。私はOGUの日本語プログラムは日本国内でも最も厳しく、難しいプログラムの一つだと思っています。4人の献身的な日本語の先生たちは、9月に授業を開始してから、継続して学生の日本語レベルを最大限伸ばせるように厳しく指導しています。また国際センターでは、常に役立つ言語・学習プログラムのみならず、楽しいアクティビティを留学生に提供できるように努めています。幸いにも多くの学生がここでの勉強と遊びのバランスに満足しているようです。

最後に、これまでで最も盛り上がりのある 秋学期を終えることができ、OGUの教員、職 員、学生、クラブ・サークルのメンバー、I-Chatラウンジのスタッフ、さらにはホストファ ミリー、寮の関係者、吹田市のコミュニティの 皆さん、その他留学生に関わってくださって いる多くの方々に感謝します。国際センター 一同、皆様の平素よりのご協力に感謝し、ま た皆様が素晴らしい2010年を迎えられます ようにお祈りしております。



バスケットボールイベント

目次:

ホストファミリー交流会&	2
講演会	

ケンブリッジ大学クイーンズ	2
カレッジ行物の学しポート	

ドイツ連邦共和国特集 3-5

派遣交換留学生レポート 5-6

~ホームビジット~

留学生数の増加と共に、ホストファミリー宅に滞在できない学生が増えてきているのが現状です。寮やアパートに住む留学生たちのために、ご家族の予定にあわせて何ヶ月かに一度、週末のみ留学生を預かってくださる家庭を募集します。

詳しくは、大阪学院大学国際センターまでご連絡ください。

Tel: 06-6381-8434(代) E-mail: inoffice@ogu.ac.jp







(上) クリスマス キャロル(中) OGU広場で のサッカー(下) サルサダンス

*ISST: International Students Support Team

ホストファミリー交流会 & 講演会 「家庭での異文化交流~目に見えないものを得、留学生とともに成長してゆく」

2009年11月6日(金)、国際センターにおいて初のホストファミリー交流会を開催しました。今年度留学生の受入れをお願いしているホストファミリーの方々10名をお迎えし、また本学国際学部の安田ー之准教授に「臨床心理学的にみた家庭での異文化交流」というタイトルで講演をお願いしました。この場をお借りして、ご参加いただいた方々に、改めて御礼申し上げます。

前半は、ホストファミリーの方々に、お名前と受入れていただいている留学生の紹介、そして留学生との生活を通じて感じられてきたことをお話いただきました。ベジタリアンや魚を食べない学生のための食事準備の大変さ、日本では常識的に考えられているシャワーの浴び方や靴をそろえる習慣がない学生たちとの異文化コミュニケーションの悩み、また、お金に対する考え方やお金の使い方が異なる国の経済事情をどのように理解すべきなのかという不安など、様々な話題が出ました。皆様率直なご意見を述べてくださり、活発な意見交換の場になりました。

そして後半は、安田先生が、ホストファミ

リーの方々のお話を聞いた上で以下のよう な講演をしてくれましたので、要約をご紹介 します。

「ホストファミリーの皆様がご経験されてい る異文化体験は、確かに大変なことです。日 本人、またはそのご家庭にとって当たり前の ことが、当たり前でなくなるホームステイ。こ の経験というのは、自分の常識が塗りかえら れる経験です。ご家庭での異文化経験をさ れている方々は、こちらの習慣に合わせても らうべきなのか、それともある程度相手側の 習慣に合わせるべきなのかという葛藤を 日々繰り返しています。理解できない場面に 遭遇したときに、どれだけ理解力を広げるこ とができるかによって、どれだけ自分の人間 性が深められるかが決まってきます。相手 のことを理解するというのは、実は自分のこ とを理解するということなのです。自分が自 分のことをどれだけ知っているかによって、 理解度の幅も変わってきます。日本に留学 に来た留学生をご家庭で受け入れられてい るみなさんは、留学生にとって、「日本のお 父さん・お母さん」ともいうべき存在です。そ

う考えると、ホストファミリーをするということは、子育てと共通している部分があります。 親になること、相手を育てるということは、子 供や接する相手に育てられるということであり、自らが成長することでもあるのです。ホストファミリーとして留学生を受け入れる際には、留学生と一緒に生活することにより、留学生と共に成長していくのだと言うことを認識しておくことが重要です。そうすることによって、ファミリーも学生も目に見えないものを得ることができるのです。このような形で、大阪学院大学の教育活動にご協力いただき、皆様には心より御礼申し上げます。」

私自身も安田先生の話を聞いて、現在留学生を預かるホストファミリーとして、「自分が与えることによって、自らも与えられている」のだということを感じました。

最後に、留学生たちに貴重な学びの場を与えてくださっていることを、ホストファミリーの皆様に心から感謝いたします。今後もこのような交流会の取り組みを続けていく予定にしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。 (T.K)

イギリス・ケンブリッジ大学クイーンズカレッジ短期留学レポート~ 森 和樹 (国際学部4年次生)

大阪学院大学では、毎年9月にケンブリッジ大学クイーンズカレッジのミルゲート教授から経済学を学ぶ短期留学を実施しています。英語で経済学を学ぶのは簡単なことではありませんが、経験と知識豊かな教授から様々な角度から見た経済学を学ぶことによって、学生たちはさらに学ぼうという刺激を受けて戻ってきます。森君は念願叶って昨秋にこの短期留学に参加しました。現在は、これまでの海外経験と語学力を活かし、ISSTでも中心になって活躍しています。

4生の春にスウェーデンのイエブレ 大学への交換留学から帰国した私は、何か新しい目標を探していました。そんな時に国際学部の先生から「本学の経済学特別講義を受講すれば、ケンブリッジ大学へ行けるチャンスがある」ということを聞かされ、ケンブリッジ大学短期留学に参加するという新しい目標を得ました。

特別講義では週1回海外との遠隔システムを利用して、ケンブリッジ大学にいる経済学の先生から直接英語で授業を受け、経済学を中心にした国際化や世界経済の仕組みなどについて勉強しました。マクロやミクロ経済、世界経済の歴史などの知識もなく、経済の専門用語も知らなかった私にはとても難しく、初めは授業についていくのに大変苦労しました。

それから1年後の2009年9月、ついに念願のケンブリッジ大学へ行くことが出来ました。そこでは今まで遠隔システムを通して勉強していたことに加えて、アメリカ、日本、イギリス、フランス、中国などの主要国のGDPを比較し、それを世界経済に影響を与えた出来事と照らし合わせていく作業に加えて、

ブレトンウッズシステムなどの崩壊からオイ ルショック、メキシコ経済危機、冷戦の終結、 ITバブルの崩壊などの世界的な大事件の原 因やその解決のために実際に各国がとった 政策、国際通貨基金、世界銀行などの働き などについて、本当にいろいろなことを勉強 しました。つい最近の出来事でもあるリーマ ンショックの波及効果について、これからより 加速していくだろう中国化などの話を聞くこと が出来たことが私にとっての一番の収穫で した。わずか2週間でしたが、今まで1年間 遠隔授業をしてくださっていた経済学の権威 であるミルゲート先生のもとで直接学ぶこと が出来たことは、かけがえのない経験だった と思います。ケンブリッジ大学での毎日は本 当に充実していて特別苦労はしませんでし た。しかしもう少し世界経済の歴史について 勉強をしておけば、ミルゲート先生にもっと 質問をすることができたのではという後悔も ありました。どんなに簡単な質問をしても丁 寧に答えてくれる先生、ゆったりとした時間 が流れるキャンパス、学生のための町であ るケンブリッジの環境は勉強をするには最高 の場所でした。



ミルゲート先生とOGU学生たち(本人: 右後方)



クイーンズカレッジのキャンパス(数学橋)

あれから約3ヶ月、現在は社会人になるまでの3ヶ月の間に、私が大阪学院大学での学生生活を通して得てきたことを後輩達に伝えていくという新たな役目を担って、日々邁進しています。



~ドイツ連邦共和国特集~

大阪学院大学では、現在ドイツにトリア大学、マインツ専門大学、バイロイト大学の3つの提携大学があります。 特にトリア大学とは1995年に学術交流協定を締結してから、毎年活発な学生交換が行われています。今回 は、トリア大学への留学経験者、トリア大学に留学中の学生、トリア大学からの留学生のレポートを掲載します。



トリアの街の 綾野睦子ストリート

綾野睦子奨学金について

ず最初に紹介しておきたいのが、綾野睦子奨学金です。 1981年からロータリー奨学生としてトリア大学の大学院に 留学されていた綾野睦子さんは、1983年11月17日、大学 へ通う途中強盗に襲われ重傷を負い、意識の戻らぬまま27歳という 若さで、同年11月21日に帰らぬ人となりました。その後、睦子さんの ご両親の寄付発意により、トリア大学は「綾野睦子奨学基金」を創設、 さらにドイツ語学の博士号取得に向けて勉強中であった睦子さんの遺 志を継ぐ日本人学生のために綾野睦子奨学金ができました。睦子さ んは生前ご両親に「自分の将来のライフワークとして日本とドイツの 架け橋となる道を選びたい」と話されていたそうです。現在、OGUから トリア大学へ留学する学生は、綾野睦子奨学金をいただいています。 それぞれが睦子さんの遺志を継いで、日本とドイツの架け橋となるべ く、勉学に励んでほしいものです。

睦子さんが死の直前までご家族に送られた手紙をまとめたものが、「睦子、留学は終わったよー西ドイツで悲しみの死」(三修社刊)として出版されています。高い志を持って精一杯勉学に励んでいた姿、文化の違いを積極的に学ぼうとする姿勢、周りのみんなに愛された人柄から学ぶところは多いです。ドイツだけでなく、その他の国に留学する学生、留学を目指す学生にはぜひ読んでほしい1冊です。国際センターに本がありますので、興味のある学生には貸し出しをします。

大阪学院大学の外国語学部ドイツ語学科は、2007年度生を最後に歴史に幕を閉じます。ここでは、数少ないドイツ学科在学生でもある若井寛実君と岸野知広君のドイツ留学体験を紹介したいと思います。若井君は帰国後、いろいろな機会に後輩のために留学体験を語ってくれています。「留学すると言うことは、日本の代表としてその国に行くのだ」と後輩に語る姿が印象的でした。岸野君は現在2度目のドイツ留学を目指してがんばっています。現在は、第2外国語としてドイツ語を学ぶ学生たちが、ドイツ留学を目指して語学の研鑽に励んでいます。あなたもドイツ留学を目指してみませんか?

"留学したきっかけとドイツでの生活"~若井 寛実(外国語学部4年次生)

つ、外国人だ!すげ~!!」 街中で偶然見かけた外国人を指差し、物珍しそうにしていた高校時代。京都や大阪に比べて外国人の少ない北海道で育った私にとって、外国人と触れ合うことなど想像もできず、ましてや日本を飛び出して海外へ行くなど考えもしませんでした。そんな私でしたが、大学生になってから学び始めたドイツ語を活かし、2年前に約1年間のドイツ留学をし、言葉では語りつくせないほどの貴重な財産を手に入れることができました。留学を決意させ、実行させるまでに私を魅了したドイツとの出会いは、意外にもドイツを紹介したテレビ番組でした。

進路の選択を強いられていた高校2年の 秋、当時何の目標もなく、何のために大学に 進学するのだろうと疑問を抱いていた私は、 たまたまテレビでドイツの紹介番組を目にし ました。そこでは、絵に書いたような街並、日 本のサイズより何倍も大きな食べ物、そして 楽しげなドイツ人の生活が紹介されていて、 今まで感じたことのない好奇心が心の奥底 からふつふつと湧き上がり、見るものすべて が新鮮に感じられました。そのとき私は漠然 とこの国へ行ってみたいと思い、大学ではド イツ語を学ぼうと決意したのです。

そして大学進学後は、ドイツに行くことを目標に勉強に励み、2年生の夏にドイツ留学へと旅立ちました。ドイツでの生活は、想像していたよりも過酷で、日本の常識はほとんど通用せず、友達もまだいず、留学当初は精神的にものすごく苦労しました。しかしドイツ人やヨーロッパ諸国からの友達が増えていくにつれて、他の国の文化や歴史をドイツ語ではいるようになり、それがひとつの楽しみになりました。私自身も日本の文化を紹介し、相手の文化を理解することで、何通りもの考え方が存在することを実感し、日本の常識にとらわれずに物事を判断し、また客観的に日本を見ることができるようになったのです。



現地の学生たちと(本人:左から2人目)

ただドイツに行きたいという理由でドイツ語を学び、それがすべてだった私にとって、いろいろな人と触れ合うことでドイツ語はひとつのツールなのだという新たな考え方に気づいたことは、留学生活において最も重要なポイントの一つだったと思います。

私が皆さんに伝えたいことは、留学は、語 学を学ぶだけのためのものではないというこ とです。語学は自分の可能性を広げる一つ の手段なのです。その手段を用いて次の一 歩を踏み出してみませんか?

2008年秋から1学期間トリア大学へ留学しました。自分の留学生活を通して、気付いたことをお伝えしたいと思います。



現地の学生たちと(本人:右から2人目)

まず留学生活をより充実した物にするために常に心掛けていた事は、"何に対しても好奇心を持つ"でした。全く違う環境で、新しい事に挑戦するのは勇気のいる事でしたが、何事も思い切ってやってみる様に心掛けました。勿論何度も失敗もしましたし、辛くなった事もありましたが、それらを乗り越えていく事で自分が一回り大きく成長できたように思います。ピンチは自分を成長させるチャンス!そう考えられる心の余裕も、留学をより充実したものにするには必要ではないでしょうか。

もし、僕が再びドイツへ留学する機会が

巡ってきたのなら、現地の学生はもちろん、 他の国からの留学生たちと積極的に交流を 持ちたいです。彼らとの交流は新しい発見や 刺激で一杯です。またその交流から新しい興 味や意欲を得ていければ良いなと思ってい ます。

留学することで、日本にいるだけではわからない、たくさんの新しい事を学ぶことができます。もしこのニュースレターを読んで、留学に興味がわいた人がいれば、是非留学に向けて行動を起こしてみてください。まずは第一歩、勇気を出して行動してみましょう!



2009-2010年度は、外国語学部の中川瑞己さん、国際学部の森本紗世さんと楽優衣さんの3名が大阪学院大学からの交換留学生としてトリア大学で勉強しています。この時期のヨーロッパは寒いですが、一度はクリスマスの時期に訪れたいものです。今回は、中川さんからのドイツ便りを紹介したいと思います。

"多くの支えあっての留学生活"~中川 瑞己(外国語学部2年次生)

イツへ留学し、早くも4ヶ月が経と うとしています。今日はこの4ヶ月 の生活とドイツでの醍醐味の一つ

であるWeihnachtsmarkt (クリスマスマーケット)を紹介したいと思います。

私はトリア大学の授業が始まるまでの1ヶ月間、ゲーテ・インスティテュートという語学学校のボン校に通いました。ボンはかつてドイツが東西に分かれていた頃の西ドイツの首都ですが、街は小さく静かです。そしてボンはベートーベンの生誕地でもあり、私がいた時はちょうどベートーベン祭の時期だったので、街は音楽で溢れていました。学校のクラスメートは社会人がほとんどで、大学生は私一人だけ。不安でしたが、仲良くなった香港の友達が街に詳しく、いろんな所を案内してくれました。授業はもちろんドイツ語のみで行われ、ついていくのに必死でしたが、周り



ケルン大聖堂とクリスマスマーケット

の友人がとても親切で、クラスが一つの家族 のように仲が良く、最後までがんばることが できました。

ボンでの語学研修が終わり、9月29日にトリアに移動しました。トリアもボンと同じく小さく静かな街ですが、トリア大聖堂、トリアのシンボルであるポルタ・ニグラ、そして美しいワイン畑は一見の価値ありです。トリア大学では友達を作るのが簡単です。というのも、大学には日本学科があり、日本語を話す学生や日本に興味のある学生が多いからです。しかしここで油断してしまうと彼らの日本語に頼りがちになってしまうので、私はなるべく毎日ドイツ語で会話をしています。

次にクリスマスマーケットの紹介です。クリスマスマーケットはドイツの各地で開催されています。街はきれいなイルミネーションで飾られ、小さな屋台がたくさん並びます。屋台には様々な装飾品やドイツならではのお菓子などがありますが、私が一番お勧めしたいのは"Glühwein"というホットワイン。冬のドイツはかなり冷えますが、これを飲むとすぐに温かくなります。そしてどこのクリスマスマーケットにもあるのが移動遊園地です。移動式の観覧車やメリーゴーラウンドがマーケットの中に設置されます。トリアで私が面白いと思ったのは、教会の鐘と共に一斉にク



現在留学中の3名の学生~トリア大学にて (本人:右端)

リスマスマーケットの屋台が閉められること。とてもドイツらしいです。

私がこの4カ月楽しく過ごせたのも周りの 友人の温かな支えがあったからだと思って います。特に昨年度のOGUへの交換留学 生であったユリア、クリスティーネ、ヨハナは 本当に親切にしてくれ、空港まで迎えに来て くれたり、家へ招待してくれたり、トリアの街 を案内してくれたりといつも私の力になってく れています。こうした良い環境で、良い友達 に囲まれて勉強できる自分はとても恵まれ ていると感じます。

ドイツではもう雪が降っています。この寒い季節も楽しみながら、残りの7ヶ月いろいろな経験を積んでいきたいです。

受入れ交換留学生レポート: Sabrina May & Jacqueline Unkelbach

サブリーナもジャクリーンもトリア大学からの交換留学生です。現在、二人ともホストファミリー宅に滞在しながら、日本での留学生活を送っています。日本での初めての大学生活の中で、二人が見た日本を紹介します。

サブリーナの留学生活レポート:

阪に来てすでに3ヶ月以上になり ますが、この間に非常に貴重な経 験をしています。

トリア大学では日本語専攻ですし、他の 留学生とは違い、私は高校生の時にも留学 経験があります。ですから、すべてが新しい わけでもなく、日本語で意思を伝えることも できます。それでも新しい発見や学ぶことが たくさんあります。



クリスマスイベントで琴を演奏するサブリーナ

OGUの授業はもちろん役に立ち、学ぶこ とがたくさんあります。でも一番の学びの場 は、教室の外にあると思います。最近、私は 筝曲部に入部しました。クラブの部員たちは とても優しく、私を受け入れてくれています。 まだ親しくなるまでにはなっていませんが、 いろいろな活動に参加する場を与えてくれる ので、日本語の練習ができます。そして日本 人家族の家でのホームステイからも得るも のが多いです。私は日本滞在中ずっとホー ムステイをする予定で、このような機会を得 られたことに感謝しています。一番身近でい ろいろなことを教えてくれるのはホストファミ リーだと感じます。ホストファミリーのお父さ ん、お母さんだけでなく、彼らの息子さんたち が、ここに来るまで想像もしなかったくらいた くさんのことを教えてくれます。いつも日本人 の子供たちが物事を良く知っていること、日 本人の親が子供に対して献身的であること に驚かされます。ホームステイをすることで 私の日本語はさらに上達し、日本人家族の

生活を見ることで、日本人、日本文化、生活スタイル、考え方を理解することができます。 さらには自分の国のことを聞かれ、様々なことを話すことで、私は両国の違いを考えさせられ、違う角度から物を見ることができるようになりました。

最初の数ヶ月が期待以上のものだったので、残りの日本滞在が楽しみです。

ジャクリーンの留学生活レポート:

2 009-2010留学生が大阪に到着して から3ヶ月が過ぎました。この3ヶ月は 西洋の文化とは違う日本での新しい 体験で一杯です。

私はドイツから約11時間のフライトを経て、とても大きな都市、大阪に来ました。到着一日目は、ホストマザーがバス停で出迎えてくれ、私の新しい家に連れて行ってくれました。一言付け加えると、私の出身都市であるドイツのトリアは、ブトウ畑と自然の中にあります。ですから、大阪の中心地での暮ら

しは、私にとっては非常に大きな変化だった のです。自分の部屋から外を見ると、通りと 建物以外何も見えなかったのはさらなる驚き でした。



留学生仲間との広島旅行(本人: 左から2人目)

もう一つ驚いたことは、ホストファミリーのバスルームです。単なる一つの部屋ではなく、3つの部屋にわかれています。シャワーとお風呂、トイレ、そして洗面台と洗濯機のあるスペース。特に日本のトイレは想像を超えるものでした。自動で電気が付き、便座は暖かくなっていて、おまけに自動で流してくれます。私はこのトイレなしでこれから生きていけるのでしょうか!?

もちろん素晴らしいトイレ以外にも私が驚いたことをあげれば、何時間あっても足りません。しかし、この留学生活で一番大切なのは、ここで本当にたくさんの人と出会い、良い関係を築くチャンスを得たと言うことです。

OGU学生、スタッフのみならず、他の国から来た留学生、ホストファミリー、家の隣りのコンビニの優しい店員さん。本当にたくさんの人と出会いました!そしてその人たちと一緒に、日本文化を学び、日々の生活の中でたくさんの新しい体験をしました。ドイツとは違う授業の進め方、新しい食べ物への挑戦、日々の様々なことを日本語で行う(例えば、電車の切符を買う!)、東京、広島、京都への旅行、そしてカラオケで夜通し歌ったこと。出会った人たち、そしてその人たちのサポートがあるからこそ、私の日本滞在は素晴らしいものとなり、夢にも思わなかったほど楽しいものとなっています。

~派遣交換留学生レポート~

"貴重な体験"~ミシシッピ大学 三﨑 大地(国際学部2年次生)

んにちは。私は昨年8月からアメリカのミシシッピ大学に留学をしています。今回はアメリカに4ヶ月間住んで感じたこと、そしてここでの大きなイベントであるThanksgiving Dayとクリスマスの体験について皆さんにお伝えしようと思います。

「日本に生まれてよかった。」これが私の 今の率直な感想です。一番の理由は、ここ でのサービスの悪さです。皆さんもご存じの 通りアメリカでは店員のサービスに対して チップを払うという習慣があります。私ももち ろんこのことを知った上でアメリカに来まし た。以前、とあるレストランに友達2人とラン チを食べに行きました。そこで私達を担当し たウェイトレスは接客中、他の店員と口論を したり、忙しいせいか私たちが食べている間 ずっと文句を言ったりしていました。そのため 落ち着いて食事ができませんでした。私はそ れを踏まえた上でチップのところに\$0.00と 書きました。それを見たそのウェイトレスは、 私達に対し「私はちゃんとあなた達のために サービスをしたじゃない。それなのにチップ はないの?」と怒ってきたのです。友達の一 人がチップを払い、その場は丸く収まったも のの"お客様に来ていただいているからサー ビスを提供する"という日本人の感覚からす ると、"お金をもらうためにサービスをしてあ

げる"というアメリカでの接客態度は、あまり 居心地が良いとは言えませんでした。これは 一つのカルチャーショックでした。

ここからは、アメリカでの2大イベントでの 体験です。私は、2009年の夏に日本語研修 で大阪学院大学に来ていたウェスリー君の 家族とThanksgiving Dayを、昨年度の交換 留学生だったティム君の家族とクリスマスを 一緒に過ごしました。Thanksgiving Dayとは 日本語で言うと感謝祭で、農作物の収穫を 神様に感謝する祝日です。毎年11月の第4 木曜日がこの祝日になります。この日は遠く に住んでいる家族や親戚が集まり、七面鳥 を中心とした料理を食べて祝います。そして クリスマスは、日本では恋人の行事というイ メージが強いですが、本当はイエス・キリスト の誕生を家族や親類が集まりお祝いする日 なのです。クリスマスの一週間ぐらい前から 家の中にあるクリスマスツリーの下にプレゼ ントが置かれ始めます。クリスマス当日は、 家族と親戚みんなでそのプレゼントを交換し ます。アメリカは家族と過ごす時間を大切に する国だけあって、家族と親戚が集まるこれ ら2つのイベントではみんな幸せそうにお互 いのことについて話し合ったり、冗談を言い 合ったりして、とても暖かい雰囲気に包まれ ていました。Thanksgiving Dayとクリスマス に私を家族の一員として迎え入れてくれた





(上) ティムの家族と(本人: 左前方) (下) ウェスリーの家族と(本人: 左から5人目)

ウェスリー君とティム君の家族には本当に感謝しています。

アメリカでの生活は毎日が学ばされること ばかりです。日本を離れてみて初めて気付く こともたくさんあります。アメリカでの生活は 残り一学期しかありません。この貴重な経験 を与えてくださった方々への感謝の気持ちを 忘れることなく、残された時間を後悔を残さ ないように過ごしたいと思います。

"My Aussie Life "~サンシャインコースト大学 宋 周勲

は韓国から日本に来た留学生です。高校の時に野球をしに日本に来ましたが、大学では野球を辞めて勉学に励んでいました。野球を辞めてからなんとなく毎日が過ぎる中で、何か僕にできることはないかなと思った時、日本と韓国のように隣国でもいろいろな文化の違いがあるのだから、他の国とはどんな違いがあるのか知りたいと思い、交換留学を目指すことに決めました。いろいろな国に提携大学があり

ましたが、大学でカンガルーが見られるという単純な理由でオーストラリアを選びました。今回、僕はOGUからオーストラリアに留学した初めての学生だったので、出発前にあまり情報がないままに来ましたが、今からオーストラリアに留学しようと考えている人たちのために僕の経験を伝えたいと思います。

まず僕が選んだオーストラリアのクィーン ズランド州にあるサンシャインコースト大学 はとてもきれいな自然の中にあります。わる

(国際学部2年次生)



大学の友人たちと(本人:前列左端)

言えばとても田舎です。街にはカンガルーや 様々な種類の鳥がいて、近くにはきれいな海 が広がっています。カンガルーや鳥たちはと ても可愛いく、動物園にいるんじゃないかと 錯覚するぐらいですが、みんな野生の動物な ので実はとても危険です。カンガルーは近寄 ると攻撃するらしく、「近寄らないで」という表 示板もあります。ランチや休み時間には、頭 を狙ってくる鳥もいるので気をつけた方がいいです。

キャンパスは海にも近く、車があれば15分で行けますが、バスに乗れば25分くらいかかります。バスの時間は規則的ですが、本数が少ないので事前チェックは必要です。サンシャインコーストではMooloolabaというビー



英語クラスのクラスメートたちと

チが一番有名で、平日、週末関係なくたくさんの人が泳いだり、サーフィンをしたりしながらAussie Lifeを楽しんでいます。こっちは日本とは違って、ゆったりとした生活が送れるので、みなさんもぜひボディーボードやサーフィンに挑戦してみてはいかがでしょうか。僕もサーフィンに挑戦するため、今必死で泳ぎの練習をしています。

話は変わって、日々の授業ですが、英語プログラムの授業は毎朝8時40分から始まるので毎日眠くて苦労しています。こちらの先生たちはとてもフレンドリーで分かりやすく教えてくれますが、中にはオーストラリアなまりが強い先生もいて、正直言うとたまに何を言っているか理解できない時もあります。学校には、スイス、フランス、サウジアラビア、ブラジル、スペイン、中国、台湾、韓国、ドイツなど世界中からの留学生がいて、僕もいろな国の友達ができました。でも英語プログラムにいると、現地の友達を作るのが難しいので、次の学期には大学の正規コースに入るために今必死で勉強しています。

こっちに来た当初は授業も難しく、ついて 行けなかったので、一人で焦って空回りばか

りしていました。でも友達が増え、みんなが励 ましてくれたり、一緒に遊びに行ったり、飲み に行ったりするうちに、自然と勉強も頑張れ るようになり、それと同時に授業に対するスト レスもなくなって、気持ちが楽になりました。 外国でその国の言葉を学ぶのはもちろん大 事ですが、やはり一番記憶に残るのは友達 との思い出だと思います。留学は決して楽し いことばかりではありません。最初は何もか もが新しくて興奮しますが、いつか必ず挫折 する時期が訪れます。僕は今回が2度目の 留学ですが、やはり落ち込む時期がありまし た。最初日本に行った時も言葉も通じず、ご 飯も口に合わず、2ヶ月で14キロも痩せて、 何度も韓国に帰りたいと思ったことがありまし た。でも、その時僕を支えてくれたのは友達 でした。そしてそれはオーストラリアでも同じ でした。だから一緒にAussie Lifeを楽しめる 友達をたくさん作ることをお勧めします。

こちらでは時間が飛ぶように過ぎていくので、時間を無駄に過ごすと勿体ないです。残りの時間を大切にし、日本で出来ない事をたくさん経験して帰りたいと思っています。みなさんも留学に向けて頑張ってください。

"初めての海外生活"~ラウレア応用科学大学 中尾 昂世(外国語学部3年次生)

なさん、こんにちは! 私がフィンランドのヘルシンキに来て、早4ヶ月が経ちました。 今日はみなさんに、私のフィンランドでの留学生活のお話をさせていただきたいと思います。

ご存知の方もいらっしゃるとは思いますが、ここフィンランドは、人口500万人、東はロシア、西はスウェーデンに隣接し、1/3の面積が北極圏という、自然豊かな小さな国です。実はムーミンやサウナはフィンランドが発祥地だと言うことをご存知でしょうか?サンタクロースの故郷もヘルシンキから北に約800キロのロバニエミという街です。

そんなサンタクロースの本場フィンランドのクリスマスはというと、ドイツなどの様にクリスマスマーケットはなく、みんなとても静かに過ごしているようです。クリスマスイブの午後2時から翌日25日までは、ほぼ全ての店が閉まり、公共交通機関もイブの午後6時から25日の終日運休になります。クリスマスイブは家族やとても近い親戚(祖父母など)だけで、キンックという大きな豚肉のハムを始めとする豪華な夕食を楽しみ、その後に家族やアルバイトの人が扮したサンタクロースが家にプレゼントを運んできてくれます。またフィンランドにはトンットゥという妖精がいて、子供達が良い子にしているか確認したり、プレゼントを包装したり、世界中の子

供達から届く手紙の整理など、サンタクロースの仕事の手伝いをしてくれます。 元々はただの言い伝えでしたが、 現在はトンットゥ



に扮した人達 が、実際にサ ンタクで働い ています。今 回のクリスマ スでは、私ストファミ

リーから、今までの人生の中で一番たくさん のプレゼントをもらいました。

さて、ここで少しフィンランドでの学校生活 についてもお話ししたいと思います。大阪学 院大学では英語を専攻していた私ですが、 ここではビジネスマネージメントを専攻して います。全く何も知らない分野で、初めは 「これからどうなるんだろう…」という不安が 拭えず、とても緊張していたのを覚えていま す。教育水準世界第一位を誇るフィンラン ド、その国にあるラウレア応用化学大学の 授業はというと、ただ椅子に座って授業を聞 くという形は少なく、基本的にはグループに 分かれてプロジェクトに取り組み、プレゼン テーションをし、報告レポートを提出するとい うのがほとんどです。初めての事に最初は とても驚き、右も左も分からないまま始まり ましたが、グループの仲間がリードしてくれ

たおかげで、なんとか無事に終える事が出来ました。終わった時には、「やっと終わった…。」という安心感と、「最後までやり遂げたぞ!」という達成感で、なんとも言えない気持ちになりました。

ここに来ていろいろな国の友人が出来ましたが、一番驚いた事は、彼らの勉強に対する姿勢や意識が私とは違うという事です。 みんな本当に真剣に考えて勉強していて、ただ「大学を卒業した方が就職に役立つから」という位にしか考えていなかった自分が恥ずかしくなりました。そんな事も日本で生活しているだけでは気付く事ができなかったと思います。この場を借りて、この素晴らしいチャンスを与えてくださった全ての方々に、心からの感謝の気持ちを伝えたいと思います。フィンランド語がペラペラに話せる様になるまで日本には帰りません。頑張ります!!



サンタクロースと一緒に(本人:左から2人目)

大阪学院大学・大阪学院短期大学 国際センター 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

Tel: 06-6381-8434(代) Fax: 06-6381-8499 Email: inoffice@ogu.ac.jp